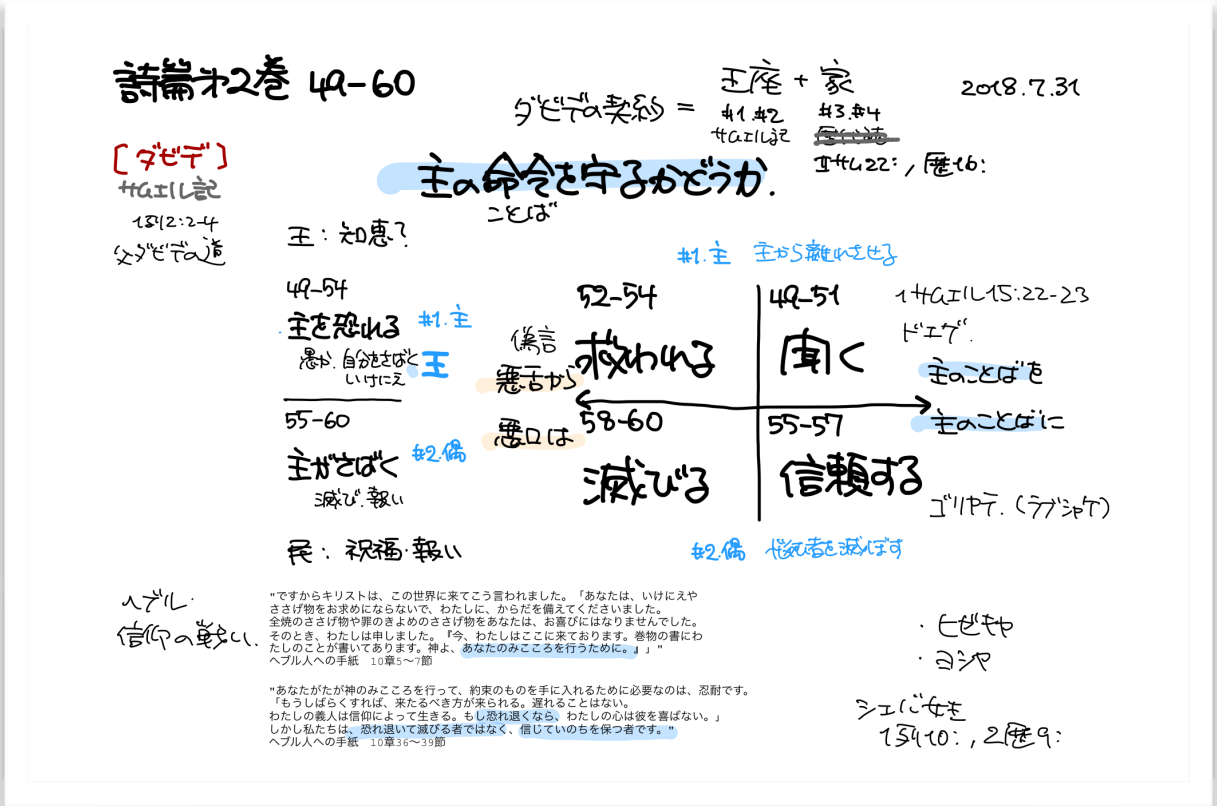
詩篇第2巻

詩篇49-60篇の配列構造



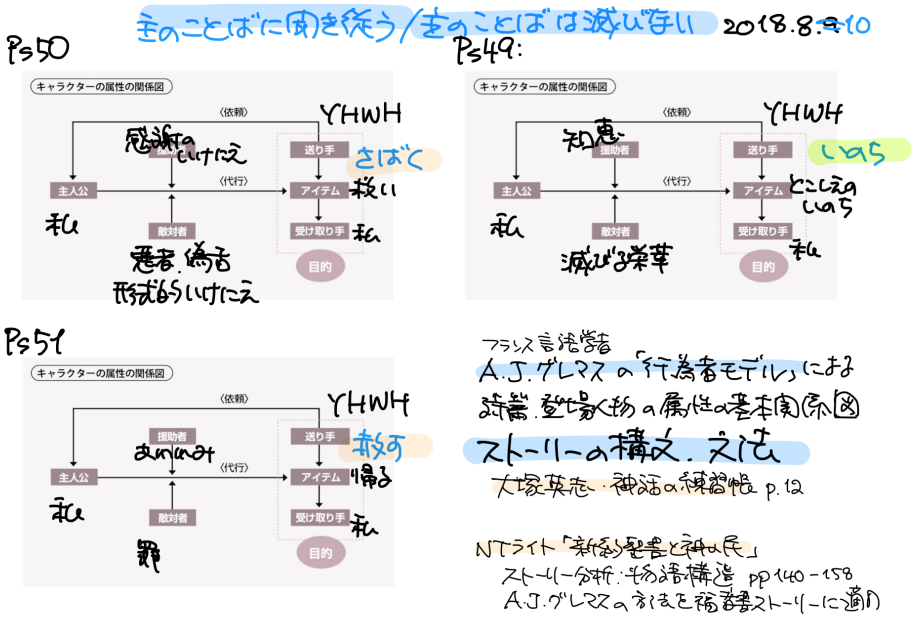
詩篇第2巻49篇から60篇まで。第2巻の真ん中の2つです。

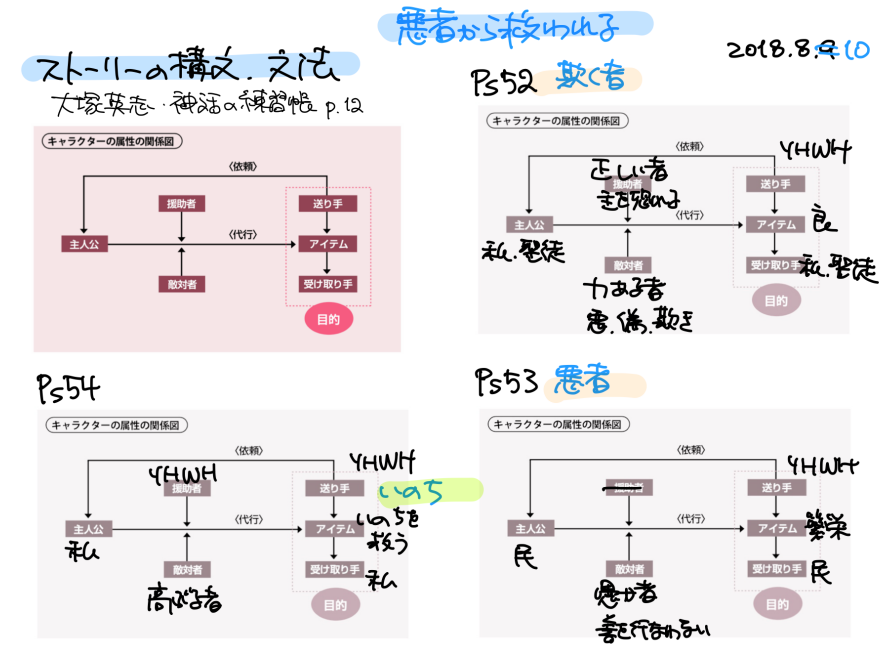
ダビデの道、ダビデの道を歩み…のところですけれど、一つは、王として(49-54,55-60)、もう一つは家の話(61-64,65-68)。この王側の歩み(49-54,55-60)です。

サムエル記の表題がいろいろついているところ。このダビデの歩みというものを見ています。49篇から60篇を4段落に分けて見てみましょう。主のことばを聞く(49-51)、主のことばに信頼する(55-57)、悪い舌から救われる(52-54)、悪い口は滅びる(58-60)ということなのですが、もう少しこの中を細かくみるということです。

ストーリーになっていますので、ストーリーを思い出すような詩篇ということですから、ストーリーの分析というものが、グレマスという言語学者が行為者モデルということで…登場人物の関係図のパターンを取り出そうとした人です。ストーリーに文法がありますということで、NTライトもその人の本を引用して話していたりします。これ自体が正確だとか、これしかないとかいう話ではなくて、役に立つので使いましょうということで、これを見ています。

ストーリーが進んでいく進み方はこの図にはありません。登場人物関係図です。送り手が何かを受け手に送る。これが目的。それを主人公に依頼する。そして、主人公はその働き、目的を代行して果たすのですけれど、その時に援助者と敵対者がいる。そして、ストーリーが進んでいくということで、この形で見てみよう、それで区別してみようじゃないかということで、今回やってみました。





49,50,51篇。52,53,54篇というつながりだったので、49,50,51篇、52,53,54篇という並び方で並んでいます。そうやって見てくると、(2018年)7月31日の時に見ていたように、最初(49-51)は聞く話です。この聞く話と救われる(52-54)というのが、(十戒の)第1番目の主のみが主であること。

主に信頼して
敵のことばをさげる。

敵が滅びる。

55篇からと58篇からのところは、偶像に仕えるな、他のものに信頼するなという敵がいる話になっていますので、これが、(十戒の)第2番目というふうに見たりしていました。その形なのかということを見てみました。

52篇からのところは、悪者から救われるというところが強調されています。それに対して、58篇からのところは、悪者が裁かれる、滅びるという結論のところ。悪者がどうなるかという話に対して、こちら(52篇から)は、正しい者、私がどうなるかというところが強調されているということで、「悪い舌から救われる(52-54)、悪い口が滅びる(58-60)」ということで分けましたけれど、それはそれで良いだろうと。

もう一方の「聞く49-51」と「信頼する(55-57)」の違いは、よくわかりませんでした。49篇から51篇は聞き従う、いけにえの話があります。55篇から57篇のほうは、信頼する。聞くことと信頼することは、特に違わないように見えますので、この違いは何なんだろうということだったのですけれど、こちらの49篇からのほうは、主のことばに聞き従う。その主のことばは、滅びることはないということかなと。55篇から57篇のほうは、敵のことばと戦っている。滅ぼす者と戦って、主のことばから離れないということで、49篇からと55篇からのところが分けられるかなと。

主のことばに聞き従うということと(49篇からのところ)、55篇からのところは、ゴリヤテとか、ラブシャケとか、敵がいて神様から離そうとするけれど、敵を退ける、分けるということです。こちら(49-51)は、主のことば自体の話をしている。主のことばと自分。(55-57は)主のことばと敵という違いなのかなというように、ここは分けて考えました。

その2つの段落ともに、1,2(49と50,51)。1,2(55と56,57)ということで、2つと1つに分かれていますけれど、この2つの部分です。50,51。56,57。これは、両方とも似ているものとして2つ並んでいると思うのですけれど、どれも、終わりが感謝です。感謝、感謝、感謝、感謝ということで終わっていきます。こちら(50)は主はさばきます、(51は)主は赦します。反対みたいな感じです。主はさばく神様です(50)。主は赦す神様です(51)。その主のことばに忠実な者をさばきます(50)。主のことばに逆らった者が戻ってくるなら受け入れます(51)というこの2つ。

56篇と57篇はどう違うのかなということなのですが、56篇は、主のことばを守って、主に信頼してそこから離れません。主のことばを守ります。そうすると、(57篇は)神様は天に引き上げて、守ってくれますという違いなのではないかと。主のことばを守ります(56)。そうすると、主は守ってくださいます(57)という違いがあるのかなということで、主に信頼して守ります(56)、主が信頼した者を守ります(57)というようなことで、この2つが並んでいるのではないかというように見ました。52篇からと58篇からも2つずつあるのですけれど、これは似ているからわかりやすいでしょうか。欺き(52)、悪者(53)、へび(58)、犬(59)というへびのような中にいるもの、外で悪者が吠えているという2つの悪者のタイプがここにあらわれているかなと思います。それと、残っているひとつずつありますね。

49篇と54篇、55篇と60篇ですが…49篇と54篇は、結論の部分がいのちが救われる、とこしえのいのちということですね。もう一方の55篇からと、60篇までのところは、捨てる話(55)、こちら(60)も捨てるということで、決して捨てられないということが言われている。捨てる話といのちの話。共にいないということですね、捨てるというのは。共にいるというのが、いのちということです。そのような並行がここにあるのではないかということを見ています。

このあとの61篇からのところの「家に住む」並行とも見ないといけませんが、少し前にやったもののいろいろな並行がありますけれど、この49篇から60篇までのストーリーは、ストーリー的に見えるものなので、題をつけたくなるという意味で、各詩篇に題もついているということですから、これがダビデの契約、神様の命令を守るかどうか、ダビデの道を歩むということはどういうことなのかというのを主のことばとの関係でずっと説明されているということだと思います。